

水稻の秋冬期管理情報第1号 (イネ白葉枯病、イネ縞葉枯病、ニカメイガ)

令和3年10月1日
愛知県農業総合試験場
環境基盤研究部病害虫防除室

収穫後は、速やかに株をすき込みましょう！

1 秋冬期耕うんの有用性

本年実施した巡回調査では、イネ白葉枯病、ニカメイガの発生量がやや多い状況でした。また、ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルスの保毒虫率が高い地点もありました。

収穫後に耕うんを行うことで、これらの病害虫の次作での発生量を減らすことができます。

なお、収穫後の耕うんは、秋期（12月まで）、冬期（1～2月）に各1回以上行うことが理想です。

2 秋期管理（イネ白葉枯病、イネ縞葉枯病、ニカメイガ）

(1) イネ白葉枯病

9月下旬の巡回調査において、イネ白葉枯病の発病株率は8.03%（平年2.17%、前年3.79%）と過去10年間で2番目に高い状況でした。また、ほ場全体で発病株が見られたほ場も報告されています。

本病の病原菌は、被害わら、もみで越冬し、次作の伝染源となるため、秋期に稲わらをすき込み、腐熟させましょう。また、畦畔雑草であるサヤヌカグサでも越冬するため、畦畔除草を行いましょう。

(2) イネ縞葉枯病

9月下旬における巡回調査では、本病の発生は確認されませんでした。しかし、一部ほ場で、ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率が高い地点があったため、注意が必要です（図1）。

本病は、ヒメトビウンカが媒介します。ひこばえは、ヒメトビウンカの生息場所になることに加え、発病株のひこばえ（図2）を吸汁することにより、イネ縞葉枯ウイルスの保毒虫率の上昇につながります。収穫後、できるだけ早く耕うんするなど、ひこばえを放置しないようにしましょう。また、ヒメトビウンカは、畦畔等のイネ科雑草でも越冬するため、ほ場周辺や畦畔等の除草を徹底しましょう。

(3) ニカメイガ

9月下旬における巡回調査において、ニカメイガの被害株率は0.87%（平年0.20%、前年0.13%）と過去10年で2番目に多い状況でした。本種は収穫後の刈り株で越冬するため、収穫後は刈り株をすき込みましょう。また、本種は畦畔雑草でも越冬するため、ほ場周辺の除草を徹底しましょう。

3 その他

イネ白葉枯病、イネ縞葉枯病、ニカメイガが発生した地域では、次作における箱施薬を検討しましょう。

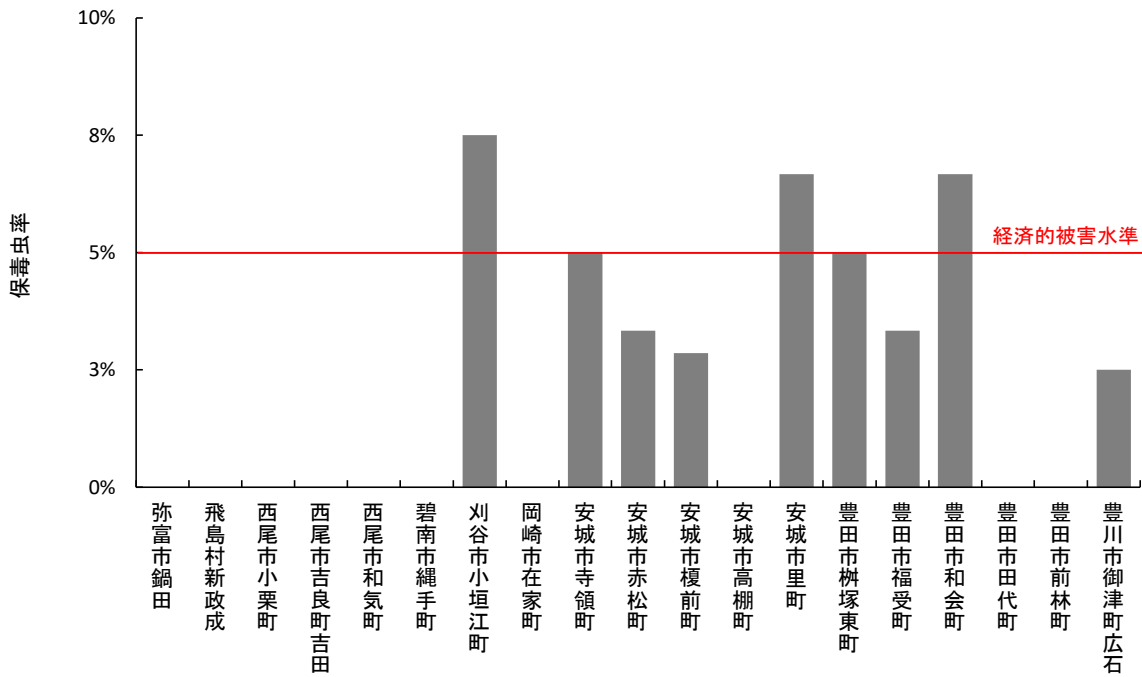


図1 ヒメトビウンカの縞葉枯病ウイルス保毒虫率（6月上旬実施）

簡易ELISA法により検定
 検定虫数10頭以上の地点のみ記載



図2 イネ縞葉枯病の症状
 (ひこばえにおける穂の出すくみ)